

氏名	阿 盈 娜		
学位の種類	博士（歴史民俗資料学）		
学位記番号	博甲第 263 号		
学位授与の日付	2020 年 3 月 31 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
学位論文の題目	中国モンゴル族の飲食文化 — 中国青海省海西州モンゴル族の飲食文化にみる多様性と地域性 —		
論文審査委員	主査	神奈川大学	教授 小 熊 誠
	副査	神奈川大学	教授 佐 野 賢 治
	副査	神奈川大学	教授 安 室 知
	副査	国立民族学博物館	教授 小長谷 有 紀

【論文内容の要旨】

本論文は、中国青海省のモンゴル族を中心に内モンゴル省のモンゴル族調査も踏まえて、モンゴル族の飲食文化について研究した。特に、海西州都蘭県のホシュート・モンゴル集団における食の実践を、中国の他地域（内モンゴル自治区中央部の四子王旗、東部のホルチン左旗）と比較することにより、その特徴を描き出したモノグラフである。

本論文は、序章と終章を含め全 5 章からなる。各章については以下の通りである。

序章

- 第 1 節 問題提起
- 第 2 節 論文の目的
- 第 3 節 先行研究と本論の視点
- 第 4 節 論文の構成
- 第 5 節 研究の対象地域と調査方法

第 1 章 モンゴル族のチャーガン・イデゲン（白い食べ物）

- 第 1 節 モンゴル族の生業と家畜
- 第 2 節 乳製品の製造過程と道具（ヒツジの乳）

小 結

第 2 章 モンゴル族におけるヒツジの屠殺と食事活動

- 第 1 節 青海省海西州の肉食
- 第 2 節 内モンゴル自治区通遼市科尔沁左翼後旗
- 第 3 節 人口と地域の影響

小 結

第 3 章 白と赤以外の飲食

- 第 1 節 モンゴル族の飲み物
- 第 2 節 モンゴル族飲食中の穀物

小 結

第 4 章 モンゴルゲルの構造と食事空間

- 第1節 青海省モンゴル族のゲル
- 第2節 青海省モンゴル族のゲル中の空間
- 第3節 モンゴル族の食事空間
- 小結
- 第5章 モンゴル族の‘ツァガンサル’中の儀礼食
 - 第1節 研究の背景
 - 第2節 モンゴル族の‘ツァガンサル’（正月）
 - 第3節 デージ儀礼
 - 第4節 儀礼食
- 小結
- 終章
 - 第1節 モンゴル族の飲食文化の多様性
 - 第2節 モンゴル族の儀礼食
- 小結

著者は、中国青海省海西州出身のモンゴル族であり、現地のモンゴル族による飲食文化が、モンゴル族が多く居住する内モンゴル州の飲食文化とは異なる点に興味を持ち、青海省を中心としながら内モンゴル州においても調査を展開して本論文を作成した。

序章では、以下の諸問題に興味を持つことをまず述べている。1 調査地モンゴル族の日常の飲食、2 先行研究で述べられていくように、モンゴル族の飲食は肉と乳製品に限られているか、3 現地モンゴル族の飲食文化と自然、社会環境、4 日常の食事生活における「デージ」に関する風俗、5 年中行事や祭祀における「デージ」儀礼と食事行動、6 年中行事や祭祀を行う場所、7 年中行事や祭祀のために作る食事の種類、8 儀礼食の作り方、食材、食器、9 どこで、誰が、どのような儀礼を行うか、10 青海省海西州モンゴル族の儀礼食の効能、11 青海省海西州モンゴル族の儀礼食の継承と変化。これらの疑問を解決するために、第1章から第5章が展開されている。

第1章「モンゴル族のチャーガン・イデゲン（白い食べ物）」では、まず調査地である青海省海西州における家畜の概要を述べ、さらに梅棹忠夫の調査と比較している。梅棹忠夫が1944年5月に初めてモンゴルを訪れて、三度にわたって奥地の草原に赴き、モンゴル族の牧畜生活についての調査研究を行った。その研究結果は1990年10月20日に出版した『梅棹忠夫著作集』や小長谷有紀が整理した『梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチ原画集』などである。筆者は第1章にその研究結果と青海省海西州モンゴル族の食生活を比較して、現地のモンゴル族の日常生活における伝統的な乳製品の製造方法、乳製品の種類と道具について分析した。

第2章「モンゴル族におけるヒツジの屠殺と食事活動」では、チベット高原に居住している中国青海省海西州都蘭県ゾンジャ鎮テンゲーレゲ村のモンゴル族の家畜であるヒツジを屠る作業について、ヒツジを草原から連れてくることから屠る作業に関する前提条件とタブーを述べ、ヒツジを屠る方法について詳しく説明した。そして、内モンゴル自治区通遼市科爾沁左翼後旗甘旗卡鎮のCさんの家で豚の屠殺作業および内臓料理を作る方法と食べる過程を記述して、二つの地域のモンゴル族の屠殺作業と肉食に関する内容を比較した。そして、青海省におけるヒツジを屠る作業の過程と人々の行動などから見ると、特に「ハルクン」と言う人と言葉と「マツチャグ月」などの存在が、チベット高原に住んでいるモンゴル族はチベット仏教の影響が強いことが理解できた。従って、各地域のモンゴル族は、生活している自然環境や社会環境により、それぞれ独特な地域文化を形成していることが指摘できた。

第3章「白と赤以外の飲食」では、青海省モンゴル族の飲み物であるミルクティー、アイラグと

チベット高原に特有な穀物であるハダカ麦と小麦の生産、食べ方と儀礼食である‘シュームル’に関する内容を詳しく紹介した。

第4章「モンゴルゲルの構造と食事空間」では、青海省海西州に暮らすモンゴル牧畜民の食事空間を調査分析した。ゲルの内部構造と名前などを詳しく紹介し、モンゴル族が自然環境の影響で周辺の材料を上手に利用して、牧畜生活に一番適した住宅を作ったことを調査した。そして、ゲルがもっている幾何学的な形の特徴、つまり円形によってゲルの内部の空間が最大になり、安定性や皆が集って過ごすようになるなど、多くの有益な点があることが理解できた。また、青海省海西州モンゴル族のゲル内部のホイモリ、男性の空間、女性の空間、カマドの空間、を詳しく紹介して、モンゴル民族の生産や生活の基礎、日常生活の全てがゲルの中に凝縮されていることを明らかにした。

第5章「モンゴル族の‘ツァガンサル’中の儀礼食」では、六種類の儀礼食を紹介し、モンゴル族の伝統的な食料とチベット高原の特有な食材で作られることを調査した。儀礼食を献ずる過程や人々の行動も、チベット仏教からの影響が強いことを分析した。そして、‘茶デージ’を神様に献じた後に皆互いに献じて一緒に飲むことや、‘ボレスゲインデージ’と‘アルケインデージ’等の献じる過程、特に‘シュームル’と‘ツッガデージ’を‘バンバア’の食材として分けて皆一緒に食べることから見ると、現地の人々は共食を重視していることが理解できた。そして‘シュームル’と‘アルケインデージ’などを献じていることから見ると、現地のモンゴル族はチベット仏教やシャーマニズムの影響を受け、儀礼食の中で人と人との共食だけではなく、人と神様や先祖との共食でもあったと考えられた。

終章では、モンゴル族の飲食文化の多様性という視点で整理した。モンゴル国や中国の内モンゴル自治区に居住しているモンゴル族に関する研究は多くあるが、青海省に居住しているモンゴル族の年中行事の食および祭祀にかかわる食についての研究は少ない。さらに、青海省海西州におけるモンゴル族の飲食文化は、チベット文化の影響を受け、内モンゴルの飲食文化とは異なることを本論文では明らかにし、今後モンゴル文化の多様性と地域性を研究する論文として明確な研究視点を指摘できた。

【論文審査の結果の要旨】

阿盈娜氏の博士論文の審査に関しては、上記4名の審査委員によって行われた。

第1章において、モンゴル族の生業と家畜について検討している。とくに、梅棹忠夫が戦前に調査した内容をまとめて、阿氏が調査した青海省海西州の家畜と搾乳の活動を検討した点は、重要である。梅棹忠夫の描いた家畜と搾乳の民具などの図が、小長谷有紀・堀田あゆみ編集の『梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチ原画集』にあるが、その調査地は内モンゴルであり、それと青海省海西州の写真とを比較しながらモンゴル族の搾乳活動を検討している。例えば、梅棹が乳しぼりのソーロクという木の桶について述べている。阿氏は、現在も青海省海西州で使われているソーロクを調査し、その側板やハンドル、桶の上部にあけられた穴にヒツジの毛で作った紐を通すことなど細かく検討している点は評価できる。さらに、1940年代に使われていた内モンゴルの桶などの民具はすでに変化しており、現在調査は困難である。しかし、青海省海西州において、その桶の現代における木製、鉄製、プラスチック製の比較と、加工について検討している。このように、1940年代の梅棹忠夫によるモンゴル族の調査資料や図を検討することは現在ほとんどないが、それと青海省での調査によって比較した点は非常に貴重な調査研究であると言える。

第2章では、内モンゴル自治区通遼市における豚の屠殺を調査している。この地域は、農牧交錯地帯と呼ばれており、漢民族と同様に豚を食べる。豚の屠殺方法は、ヒツジの屠殺方法とは異なる

が、血を丁寧に集めて内臓料理を作ることや焼いた内臓などを皆で一緒に食べることなど、モンゴル族の食文化の影響を受けている。これらは、著者阿氏の故郷とは異なり、写真を細かく撮って報告している。この事実自体は、青海省のモンゴル族にとっては貴重と言えるが、モンゴル族と漢族の豚の屠殺の比較についてはすでに論文があり、その論文との比較研究が必要である。しかし、青海省のヒツジ屠殺と内モンゴルの豚屠殺の比較研究は、モンゴル族の地域性と多様性を検討する意味で、必要である。

第3章では、食物の儀礼とチベット高原のモンゴル族の儀礼食である‘シュムール’の意味する世界観の分析について、単なる食生活を越えた食文化の考察として研究されている点は注目できる。大型動物を狩猟した際は、他の家族にも分けるが、それを食べるときは‘デージ’と言ってそれを神や祖先、そして年長者に捧げる儀礼がある。‘デージ’儀礼に6種類の食物があるが、その中の‘シュムール’は、はだか麦に牛や羊の乳を入れて作る。小山のように作り、その上にバターを置き、これが太陽と月を表す。四方に‘ウルム’という牛乳からつくられた食べ物を置き、四州を代表する。この食べ物は宇宙を表し、また仏教の須彌山を表している。このように、‘シュムール’が食物と宇宙観を示している点の分析は、食物文化として有意義な研究である。

第4章では、モンゴルの住宅であるゲルの構造と食事空間を検討している。丸い住宅であるゲルの中で炉とカマドを使うが、この点の変化と比較の調査は有意義である。モンゴル族の伝統的な炉は、‘トルガ’と呼ばれて鉄で丸くつくられる。これは移動式である。それに対して、土でできた固定的なカマドがある。近年は、内モンゴルでゲルの中にカマドを作るようになり、漢民族の「炕」に似てきているが、漢民族は「炕」で食事を作るのに対して、モンゴル族は食事は作らない。同じような「炕」を使うが、モンゴル族と漢民族の火の使い方が異なる点は民族の文化の違いが見える。また、ゲルの中は、男性の空間と女性の空間に分かれており、それが幾何学的に利用空間として決まっている。男性の空間と女性の空間で、置く家財などが細かく調査しており、その点は有意義であるが、それがどのような意味を持っているのかについてさらなる調査が期待できる。

第5章では、食事儀礼で大事な‘テージ’について議論している。遊牧民族であるモンゴル族が、捕った食料を年長者から順番に分けて食べるが、まず「神との共食」として神に‘テージ’を供物として捧げる。その後、「人の中での分配」として同じ名称で同じ内容物を年長者に捧げる。本論文では正月の儀礼食として6種類の特別料理を取り上げ、それぞれの‘テージ’を検討した。とくに、‘シュムール’と言ってチベットの影響が強くハダカ麦を炒めて粉にして盛り、周りにバターの固まりを四方に置く。これは、青海省のモンゴル族で作られる食物で、最初に天の神と地の神に供え、祖先としての左胸に供える。これは、仏教の須彌山の食べ物から作ったものと考えられ、現地のモンゴル族がチベット族の影響を強く受けていることがわかる。このように正月の儀礼食における‘デージ’儀式を分析し、共食を重視する中で神や祖先と人の共食を重視した。この分析は、食べ物と神や祖先そして人との関連が分析でき、食事を食文化として人と神や祖先と比較して研究した点は有効な分析である。

モンゴル族の飲食文化が、青海省のモンゴル族と内モンゴルのモンゴル族でかなり異なる部分がある点を地域性と多様性で整理することができた。また、モンゴル族の儀礼食が、神や祖先と人との間で共食ができ、さらにそれを分配するという食事文化の特殊性が明確に調査できた研究と認めることができる。

以上、本論文は神奈川大学歴史民俗資料学研究科における博士論文として大きな成果を上げ、高度な水準に達していると評価できる。本論の審査結果に基づき、阿盈娜氏に博士(歴史民俗資料学)の学位を授与することがふさわしいものと審査員一同これを認める。